

東京オリンピックと

横浜②

今から半世紀前の一九六四（昭和三九）年一〇月、第一八回オリンピック東京大会が開催された。都内の明治公園・駒沢運動公園・代々木スポーツセンターを中心に、神奈川県・埼玉・千葉・長野の各県でも競技の一部が開催された。神奈川県では、江の島（ヨット）、相模湖（カヌー）のほか、横浜市では文化体育館でバレーボール、バスケットボール（予選）、三ツ沢公園球技場でサッカーが開催された。野毛山公園の展望台付近には、市内で行われた三競技を掘り込んだオリンピック記念碑（一九六六年一〇月建立）が残る。

競技場は大会の運営全般を掌るオリンピック組織委員会で決定されるが、その際には各競技種目の国内総括団体や国際競技連盟の意向も重要である。競技場の誘致に成功すれば、数千人規模の動員が見込まれるほか、地元の宣伝効果が高まり、また周辺道路などのインフラ整備が期待されることから、首都圏の各自自治体によって様々な誘致合戦が繰り広げられた。

ここでは、一九五九年の東京大会決定前後から、横浜市が行った競技場の誘致活動について概観する。

まずはヨットを！

前号で、幻に終わった第一二回オリ

ンピック東京大会に際して、横浜市当局や横浜市体育協会の働きかけが功を奏し、ヨット競技の誘致に成功、新山下にヨットハーバーが建設された経過について述べた。戦後のオリンピック開催にあたり、横浜が最初に誘致を目指した競技もヨットであった。新山下のヨットハーバーは、終戦後、米軍に一時接收されていたが、一九五二（昭和二七）〜五年の返還以後は、日本ヨット協会、大学等に利用されていた。しかし既にその狭さが問題となっており、オリンピック開催に必要とされる、舟艇二百、参加人員千数百、海上二万坪、陸上二万坪の収容・確保は難しかった。そこで横浜市は、富岡を新たな会場に想定して誘致活動を始めた。

東京開催が決まる前年の一九五八年一月二一日、横浜市長（平沼亮三）は蔵相（佐藤栄作）宛に、一通の請願書を送った。その内容は、近く撤退が予想される金沢区富岡町の米軍接收施設（第五〇八通信修理隊）の跡地（約一〇万坪 大半が国有地）に、東京商船大学や運輸省海員学校を誘致し、さらに地元で不足する高校・中学校を新設し、加えてヨットハーバーを含む臨海公園を建設し、ここを一大文教地区としたい。あわせて「一九六四年のオリンピック東京誘致に備えると共に、現在の港域内の狭隘なヨットハーバーを解消して一大広漠の海岸に発展の基礎を築かん」と。ついで、接收解除の促進と国有地の無料譲与を願いたいと



1950年代の根岸湾 手前に見える埠頭が富岡接收地区
広報課写真資料

いうのである。

こうした横浜市側の姿勢を、当初は神奈川県もバックアップしていた。内山岩太郎県知事は、在日米陸軍司令官に対し、富岡地区が「最良の教育地として衆人の注目するところであり…ヨット競技場として富岡通信施設は唯一最適の候補地に挙げられております」と、早期接收解除を要請した（一九五九年五月三〇日）。

しかし米軍側の回答は厳しいものであった。在日米陸軍司令部のアレキサンダー准将は、内山知事に対する書簡（六月一五日）のなかで、池子の弾薬の揚陸施設を久里浜から富岡に移転させる計画があり、十分な機能を有する代替地が見つからない限り、富岡の接收解除には応じられないと回答した。

横浜市はあきらめず、横浜調達局宛に富岡の接收解除促進を要請する（六

月二九日）一方、神奈川県宛に再度の請願を行った（七月一日）。またこの年一月二〇日に発生した東洋化工株式会社横浜工場の火薬庫爆発事故を受けて、金沢区の町内会長らは、弾薬揚陸施設反対と接收解除を神奈川県に強く求めた。しかし、米軍側の姿勢を動かすことはできなかった（以上の経過は神奈川県立公文書館所蔵「提供施設関係書類綴 富岡通信隊」による）。

こうしたなか、神奈川県は一九六〇年に入った頃から、富岡の接收解除は困難とみて、江の島会場案に傾きつつあった。三月八日に開かれた県の部長会議で、内山知事は「米軍側が」このように決定的に言っている以上、私としてもやり方がない、そうなるヨットの問題も江の島ということになるが、これは伏せておきたい」と本音を漏らしている（神奈川県立公文書館所蔵「部長会議関係書類」）。

同年五月一九日に日本ヨット協会は会場を江の島にすると決定、六月一〇日の組織委員会で正式に決定した。

接收解除、文教地区整備、オリンピック誘致、という横浜市の一石三鳥の目論見は画餅に帰したのである。

レスリングと文化体育館問題

一九五九（昭和三四）年四月に横浜市長に就任した半井清は、その年の二月二〇日の日記に、「1. レスリング（オリンピック）誘致運動、小西市議、八田会長、1. 文化体育館、平沼記念

体育館、1. 団体ヨット」としたためた。ヨットの誘致が暗礁に乗り上げていた頃、レスリングの誘致活動が、同協会会長の八田一朗や市議らの間でひそかに進められていたのである。会場には横浜文化体育館が想定されていた。同体育館は、開港百年記念事業の一環として、中区不老町に、地上二階・地下一階、収容人数五〇〇〇人規模、国内有数の設備を整えた体育館として建設することが計画されていた。

翌一九六〇年一月一九日、八田会長は、オリンピック組織委員会の委員に就任した内山知事に対し、横浜でのレスリング競技開催を打診した。

けさ八田氏がみえて世界選手権大会の協力を依頼されるとともに、東京オリンピックのレスリングも協会としては横浜でやる方針で進んでいるから、組織委員会でもそういう方向にもって行って欲しいという話であった。有望な室内競技の一、二を横浜、川崎で開催して欲しいということは自分も公式に文書で要望してきたことであり、レスリングがくることは大いに歓迎するし、県としても最大限の協力を惜しまないつもりだ(内山知事談話、『神奈川新聞』二月二〇日)

横浜市では、一九六一年五月に予定されている世界アマチュアレスリング大会を横浜文化体育館で開催し、その実績をもとに五輪誘致を目指そうとしていた。このため収容人数を六五〇〇



屋根が崩落した横浜文化体育館(中央の白い部分が落下した屋根)
広報課写真資料

人に拡大するなど、大幅な設計変更が加えられ、文化体育館は一九六〇年四月に着工された。

同年八月二四日、ローマで行われた国際レスリング連盟総会の席上、翌年の大会を横浜で開催することが正式に決定した。文化体育館の工事は進み、翌一九六一年一月の時点で八割が完成、五月一〇日には竣工の予定だった。

ところがここで大きな誤算が起こった。三月二六日、完成間近の文化体育館の天井、四五〇〇平方メートルのうち半分以上が落下する大事故が起きたのである。例年にならない積雪と、屋根の強度計算に大きな誤差があったことなどが原因とされる。

幸い日曜日だったために負傷者は無

かったが、レスリング競技の誘致は絶望的だった。世界アマチュアレスリング大会(六月二日〜八日)は、会場を慶應義塾日吉記念館に変更して行われたが、クローン国際アマチュアレスリング協会会長は、オリンピック組織委員会に対して、都内の会場設置を申し入れた。ヨットに続き、レスリングの誘致にも失敗したのである。

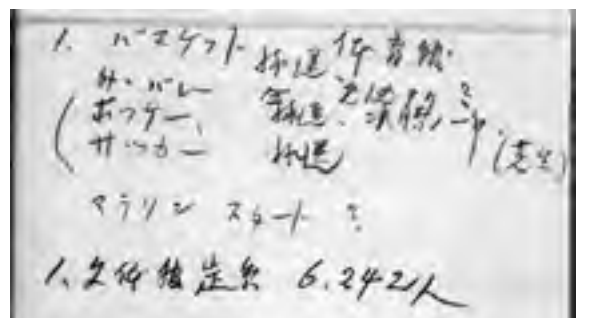
横浜市会では、落下事故に関して市当局を厳しく批判する声も起こったが、半井市長は、追加予算を組んで文化体育館の落成を急ぐことにした。同年末には工事が再開され、翌一九六二年五月一日無事に開館を迎えた。建築面積は八〇四二平方メートル、移動用を含めれば六二四二人の収容人数を誇る国内で二番目の規模と言われた(総工費は五億四七〇〇万円)。

この日、日本バスケットボール協会は、オリンピック東京大会の予選(五輪の開催前に実施される)を、横浜文化体育館で行うことを明らかにした(『朝日新聞』五月二二日)。横浜市にとって久々の朗報であった。

サッカーの三ツ沢誘致

一九六二(昭和三七)年夏頃から、半井市長の手帳には、オリンピック関連の記事が頻出し始める。バスケットの予選に加えて、サッカー・バレー・ホッケーの予選ないしは決勝の一部を誘致しようとしていたようである。

この頃、オリンピック組織委員会



半井市長の手帳(1962.2.1~8.31)の末尾の書込み
「半井清文書」

は、準備の遅れが大きな問題となっていた。開催まであと二年少しと迫っていたが、東京のオリンピック道路の建設工事は遅延し、会場の決まらない競技がいくつもあった。内山知事は、「岸信介さんあたりがなつてはつきりやるべきである。速記を取つたらと言っているが、それもやらず、同じことを何べんもやっている」**「あんな馬鹿々々しい処へ行くのは腹が立つ」**と、県部長会議で怒りを爆発させていた(一九六二年二月一四日)。

サッカーについては、既に国立・秩父宮・駒沢の三競技場が内定していたが、参加国一六チームを四グループに分けてリーグ戦を行うには競技場が不足していた。そこで追加会場を検討することとなり、一九六二年九月二四日に開かれた組織委員会の施設及び競技



整備が完成に近づいた三ツ沢公園球場

広報課写真資料

の両特別委員会幹事打合会で、三ツ沢公園球場と大宮公園球場が候補として挙げられた。

会場について打診を受けた横浜市は、一月五日に次のような回答を行った。

当三ツ沢競技場は、これまでも日

米対抗国際競技をはじめ国民体育大会等に使用されてきたものであり

ります。当競技場への交通は、東京方面からは現在第三京浜道路が建設中であり、また、東京急行電鉄

東横線をもってすれば一時間以内の距離にあることを申し添えます

しかし、同球技場の場合、観客収容力(二九〇〇人)に大きな問題があつ

た。先の回答では、総工費二億円を費やして、二万人規模のスタンド増設工

事を提案している(横浜市各課文書「昭和三八年 オリンピック関係綴り」)。

これが受け入れられ、翌一九六三年

三月二十八日、三ツ沢公園球場は大宮公園球場とともに正式にサッカー競技会場となった。同年二月から拡張工

事が行われ、翌年九月に一四〇〇〇人収容のスタンドが完成した。

バレーボールの文化体育館誘致

バレーボールは、東京オリンピックで初めて採用された競技で、当初は男子のみとされていた。しかし日本バレー

ボール協会などの働きかけもあり、一九六二(昭和三七)年六月のI O C総

会で女子の参加が認められ、会場の増設が必要となった。同年八月一八日の

第三一回組織委員会の席上、駒沢運動公園に新設される屋内球技場(主会場)

と別に第二会場を増設することが決定した。東京の台東区台東体育館と横浜

文化体育館が名乗りを挙げ、熾烈な誘致合戦が繰り広げられた。

会場の規模・設備ともに文化体育館の方がはるかに優れていたが、女子の

金メダルが期待される有力競技ということもあって、東京都側も容易に引き

下がらなかった。台東体育館の代わりに、晴海の貿易センターに四千人規模

の仮設スタンドを建設する案を提起するなど、横浜側に対峙しようとした。

横浜市の誘致活動を実務面で主導していたのは、市総務局次長の青木近衛

という人物であった。彼は、東京から

の交通の便、施設規模、市当局の熱意などを、東京都や日本体育協会の関係者や、オリンピック組織委員会、日本バレーボール協会の幹部らに繰り返し説いて回った。

一九六二年一月九日、神奈川県と横浜市のバレーボール協会は連名で、

日本バレーボール協会に対し、平沼亮三元市長(一九五九年二月没)が初代

会長であったことを持ち出し、「故人の恩顧に報い、その霊を慰めたい」と

同情に訴える請願書を提出した。

日本バレーボール協会幹部で、女子バレーの五輪参加を成功させた今鷹昇

一(オリンピック東京大会準備委員長)らは、横浜文化体育館のすぐれた設備

と、横浜開催の意義を深く理解していた。翌一九六三年一月一日、日本バレー

ボール協会は、オリンピック組織委員会宛に、第二会場として横浜文化体育館を推薦した。

純粹に競技施行の立場からと、横浜市は当協会初代会長平沼亮三先

生出身の地という深い関係もあり、バレーボールの普及発達を念願さ

れた先生ゆかりの同市に於て、オリンピック史に初めて実施される

本競技を行なうことも又意義深きものある：(バレーボール競技第

2会場の件)

さらに今鷹は、一月二五日に与謝野秀(組織委員会事務局長)に宛てた意

見書のなかで、横浜文化体育館が、収容人数、選手村や第一会場(駒沢)か

らのアクセス、観客動員などの面から見て、台東体育館よりも優れており、七千人程度の収容力を求める国際バレーボール協会の意向にも副うことができる、と述べている(横浜市各課文書「昭和三八年 オリンピック関係綴り」)。

横浜市ではこの年六月の市長選挙で飛鳥田一雄が当選した。就任間もない

飛鳥田市長は、六月二十八日に東京体育館で行われたバレーボールNHK大会

の視察を兼ねて、日本バレーボール協会の幹部らに横浜開催を強く要望した。

こうした粘り強い誘致運動の結果、一九六三年八月二日の組織委員会で、

バレーボール第二会場に横浜文化体育館が決定した。東京オリンピック開催

の一年二ヶ月前のことであった(以上の経過は『オリンピック東京大会 バレーボール競技報告書』による)。

サッカー、バレーボールの開催決定を受けて、横浜市ではオリンピック準備局(一九六三年三月六日設置)を改

組し、総務局内にオリンピック事務局を設置した(八月二三日)。また九月

二十八日には横浜市・横浜市会・横浜市体育協会・学識経験者で構成されるオ

リンピック東京大会横浜市実行委員会が発足、競技場の建設、周辺環境の整備、オリンピック開催に向けた世論喚

起を行うこととなった。

横浜の人びとがどのように東京オリンピックを迎えたのかについては、次号以降に譲る。(松本洋幸)